

二〇〇八年の三月、海外旅行がしたいと夫が言った。カンボジアあたりがいいかもしれない。夫の万全でない体調を考えると、長い空の旅は避けたかったし、かといって、中国や韓国は近すぎて、私の求めている異文化を味わう喜びはあまりないような気がしたからだ。

テレビでよく取り上げられているアンコール・ワットでも、ちょっと見て来ようという軽い気持ちだった。けれど、六年という時間のフィルターを通すと、私の記憶に未だに残っているのは、ジャングルの中で見つかった遺跡群ではない。はだしの子供たちや、ツアーのガイドをしてくれた青年の話なのだ。

どこに行っても子供たちに囲まれた。絵葉書やスカーフを手に駆け寄ってくる。

「安いよ。たった一ドルだよ。買ってー!」

日本語で必死にアピールするのだ。物価は安い。五歳から働けるというこの国で頑張っている彼らのために、数百円ぐらい何ということはない。けれどあつという間に五人も十人も集まる、その全員から買うというわけにはいかない。誰かを選んでというのは、もっとできない。遺跡の入り口で、バスの駐車場で、一日に何度も出会うことが、苦痛になってくる。頼まれればいやとは言えない夫は、私の背後に隠れるようになった。

さらに心が痛むのは、幼い物乞いである。アンコール・ワットの中で、それぞれに乳飲み子を抱いた七歳ぐらいの女の子二人が側に来たことがあった。私の顔をじっと見て何か言った。大きく黒い瞳の中に怒りのようなものさえ感じ、目をそらせたくなる。けれど、小さな口から洩れる声はあまりに弱くて聞き取れない。バスに戻ってやっと、お金を欲しがっていたのだということに気付いた。

六〇メートルのプノンバケンの丘に登る山道に、三歳ぐらいの女の子がひとり座っていた。狭い道は、入り日を見ようと急いでいる大勢の観光客であふれている。その足元でよろけそうになりながら、ただうつむいているだけの女の子。

トンレサップ湖で水上生活を見学しようとしていた時のことだ。車のエンジンを使った我々の船に近づいてくるものがある。日本では姿を消した金盃だ。小さい男の子が中に座って手で漕いでいる。ブルブル音を立てているエンジンにひるむことなく、船のへりにしがみつき、手をにゅーと出してきた。

「物乞いするということとは、子供たちにとって決まっていいることではないのよ。その行為は彼らを卑屈

にするし、安易に金銭を得られると錯覚させるからよ。土産物を子供たちから買うというのもきりがなしね」

ツアーで一緒になった中学校の先生たちは、断固たる態度で拒否している。カンボジアに学校を作ろうという募金運動が、日本にもあることは知っていた。動揺する気持ちを一時的に抑えるためにお金を渡したり、不要なものを買うことはやめよう。旅の最後にできる限りの額を募金箱に入れようという決心を、彼らが何度も揺さぶる。

四日目に、思いあぐねて現地ガイドのエリオットに聞いてみることにした。三十歳になる背の高い彼は明るい人柄で、自国の文化に誇りを持っていることがよくわかる。

「遠い昔、タイもベトナムもみな、カンボジアのものでした」

と言っていたからだ。そして細部にまで行き届いた気配りができる好青年なのに、このような子供たちに関しては、それまで何も言わなかった。

「彼らにどう接したらいいの？」

「日本は豊かな国ですが」と始まった。

「私たちの国は、つい最近までとても大変でした。あの子たちの親は、地雷などで負傷して働けないのでしょう。小さいころから物乞いをすることで、心は傷ついていると思います」

長引いた紛争の残したものに憤慨しているようだった。分かっている、なすすべもない現実が目の前にある。だから、

「お金をあげるかあげないかは、あなた方の気持ち次第です」

という言葉業しか返せないのかもしれない。聞いてさらに迷うことになってしまった。

「このエリオットは、高校を出た後、二年間お金を貯めて大学に行き、日本語を学んだ。その日本語でガイドをしながらやはりお金を貯め、近いうちにオーストラリアに留学するのだそうだ。そして、いつの日か自分の国で働くのが夢だという。」

「なぜアメリカやイギリスじゃないの？」と尋ねると、「物価が安いから」と返ってきた。正直に答えているとは思えなかった。

「日本語がしゃべれるのだから日本はどう？」

これまた答えにくそうな表情に、私はそれ以上何も聞けなかった。彼の心の中には、私の及びもつかない歴史の残した複雑な感情がからみついているのかもしれない。

あれから六年が過ぎた。私に孫が三人できた。時折顔を見せる孫の相手をする時、カンボジアの子供たちを思い出すことがある。今も赤土のほこりにまみれた女の子が、乳飲み子を抱いて遺

跡のあたりをうろついているのだろうか。遠くに観光客の船を見つけると、エンジンに巻き込まれないように用心しながら、盪で近づこうとしている男の子がいるのだろうか。そして彼らのために、エリオットは今も夢に向かってがんばっているのだろうか。

旅から戻った日、東京で大学の卒業式を終えた青年たちをたまたま見かけた。高そうなスーツを身にまとい、談笑しながら街なかを歩いていた。彼らは自国のために働かねばと切実に思ったことがあるのだろうか。貧しい国の青年のように、使命感に燃えて何かに向かおうとすることがあるのだろうか、と思ってしまった。

「シエムリアップは建設ラッシュで、日に日にその姿を変えているそうだ」

「カンボジアの生活水準は向上して、家電の需要が高まっているそうだ」

最近、夫がパソコンで得た情報に驚いて報告してくれたが、それらがすべての国民にとっての、好転している証とはかぎらない。

カンボジアに行かなければ改めて考えることもなかった、恵まれた日本での生活。必死で生きている子供たちや、志を抱く青年の身に、パソコンの情報のいい形での影響が表れていることを願うのみである。